

シャバーニの配慮と集団構造の変化

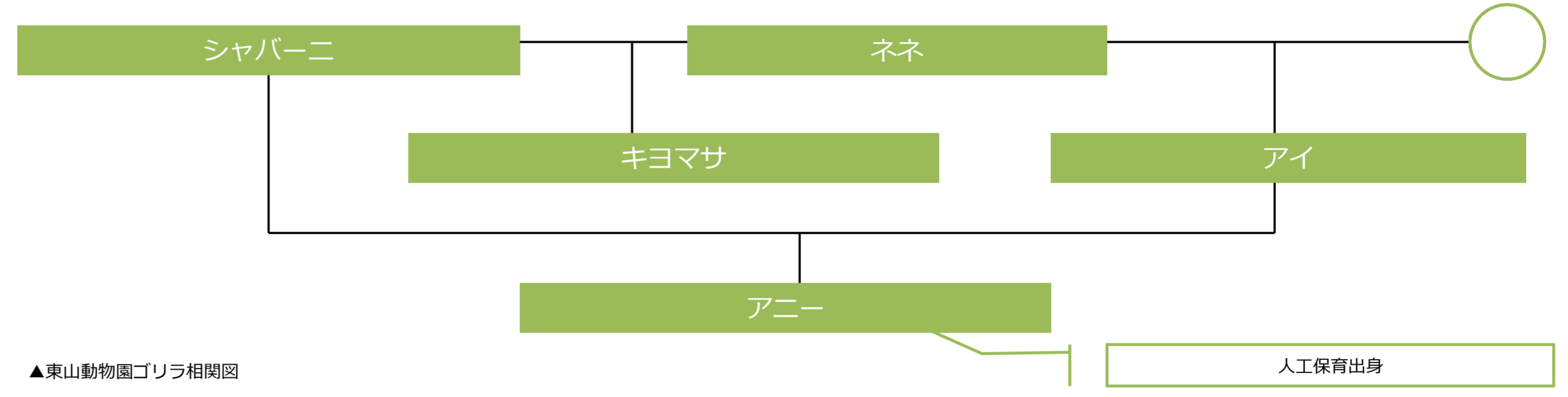
後藤宏文・小川修平・木村岳瑠・船戸乃吏佳・宮尾結衣（岐阜県立関高等学校）

研究の目的と方法

我々5名は、東山動物園のニシローランドゴリラ5頭の行動観察を6回にわたって行った（2015年8月～2016年5月）。この5頭はボスオス（シャバーニ）とその配偶者メス2頭（ネネ、アイ）、それぞれとの間に生まれたオス・メスの子ども2頭（キヨマサ、アニー）からなる集団である。個体間の親疎関係を明らかにすることにより、子育てや家族関係についての考察を深めることが目的であり、一定時間内における接触回数や種類、距離等を記録、その試行錯誤から、以下の予察を得た。

※観察・記録に際し、ゴリラの行動の内容を以下のように定義し分析・考察を試みた

大区分	小区分	定義
接触（直接相手に触れる行為）	P	その場で遊ぶ行為
	T	体が触れ合う状態
	O	移動を伴う遊びやドラミング等
近接		同一エリアで存在

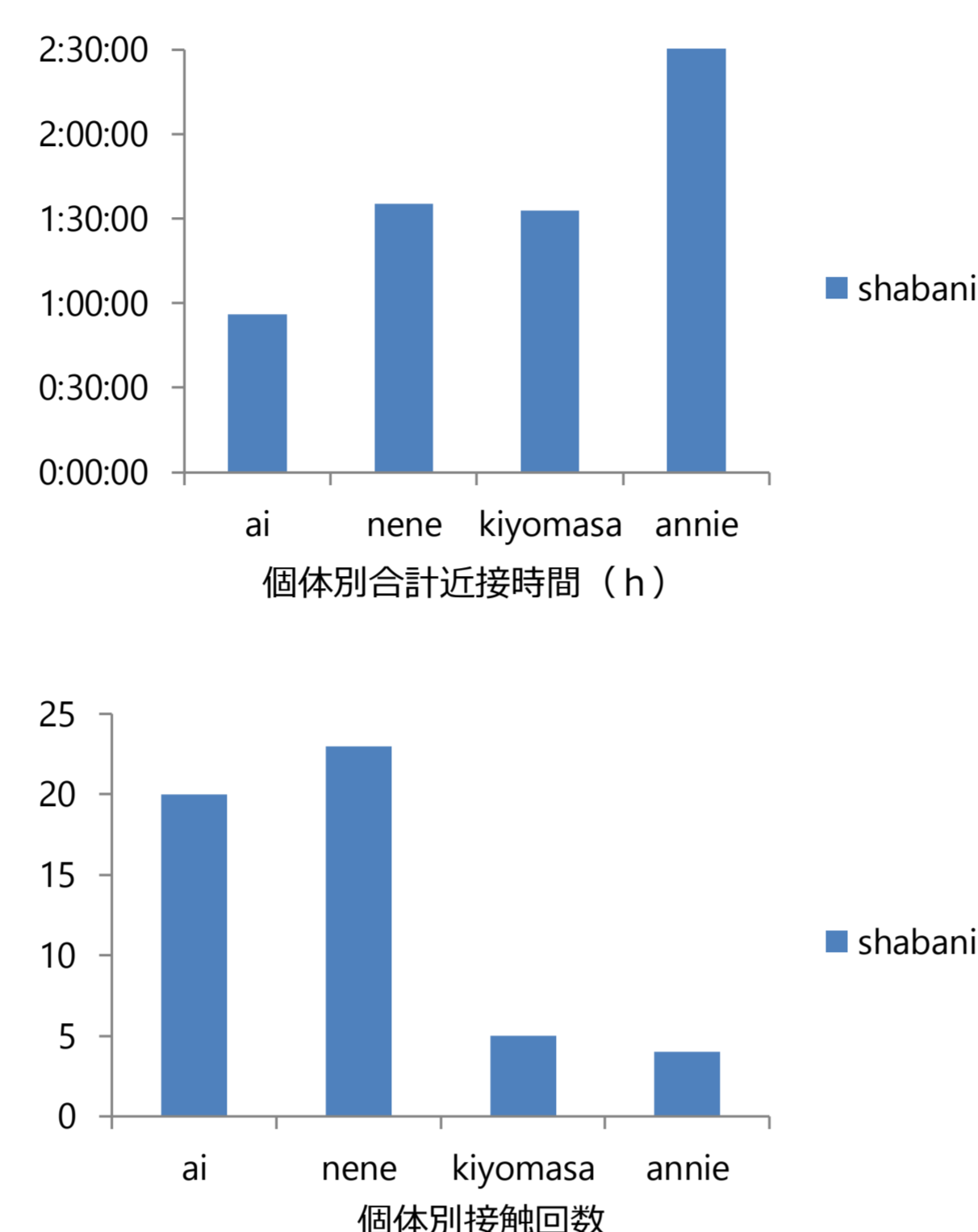


シャバーニの配慮

他の個体に対し様々な接触（じゃれあい・近接等）を試みる。

集団全体を安定に導くための配慮とみなす

2頭の配偶者には接触を
2頭の子どもには近接
（間接的な見守り）を試みる傾向がある。

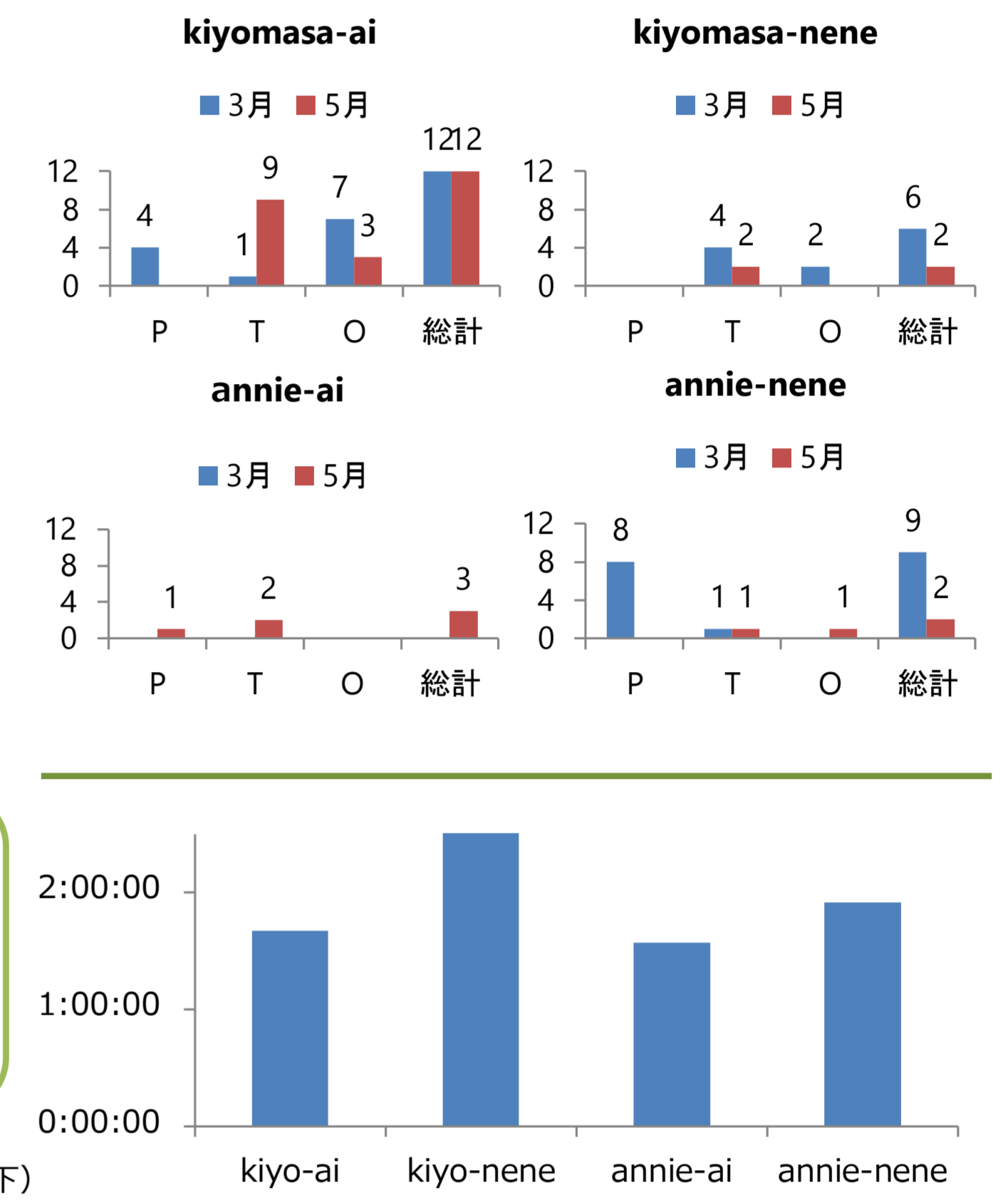


アイとアニーの関係の変化

アニーとアイの関係は、接触回数ゼロの状態から遊びを含む接触回数増加へと「改善」に転じた

「母娘」ではなく「遊び相手」のような印象を受ける

アニーは人工哺育で育ったため親子関係の認識が薄れた（あるいはなくなった）のか？

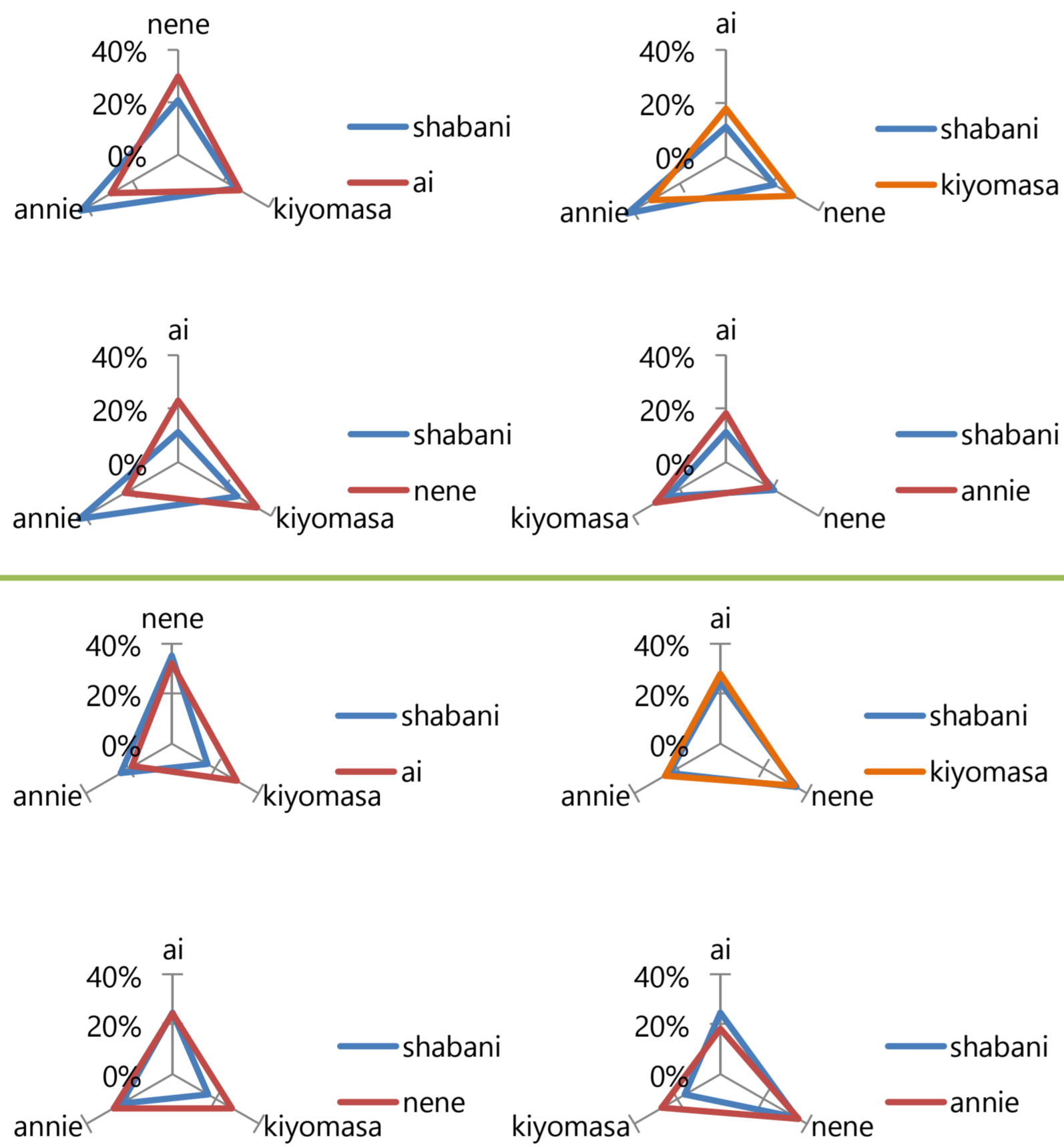


キヨマサの成長

観察当初はシャバーニと似た行動傾向の個体はいなかった

時間の経過と共にキヨマサの行動傾向がシャバーニに似てきている

キヨマサがボスのシャバーニに近づいている



左図：個別別近接割合（2016/3/26（上）5/29（下））

考察

ボスオスであるシャバーニの配慮を背景に群れの社会構成は徐々に変化している

変わらないもの

- シャバーニの配慮
- メス同士の平和な関係

変わったもの

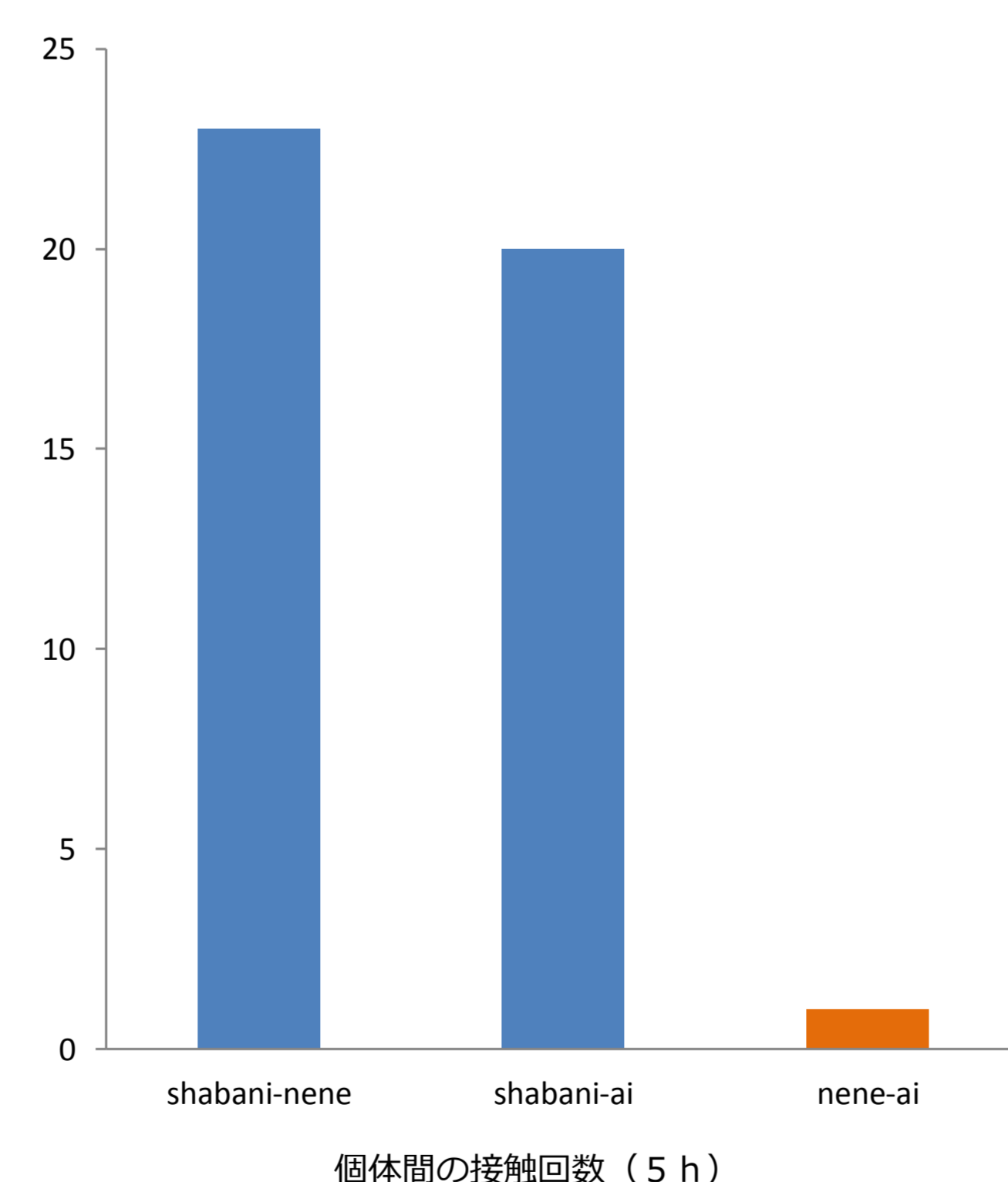
- アイとアニーの関係の進歩
- キヨマサのボスへの成長

ネネとアイの静寂

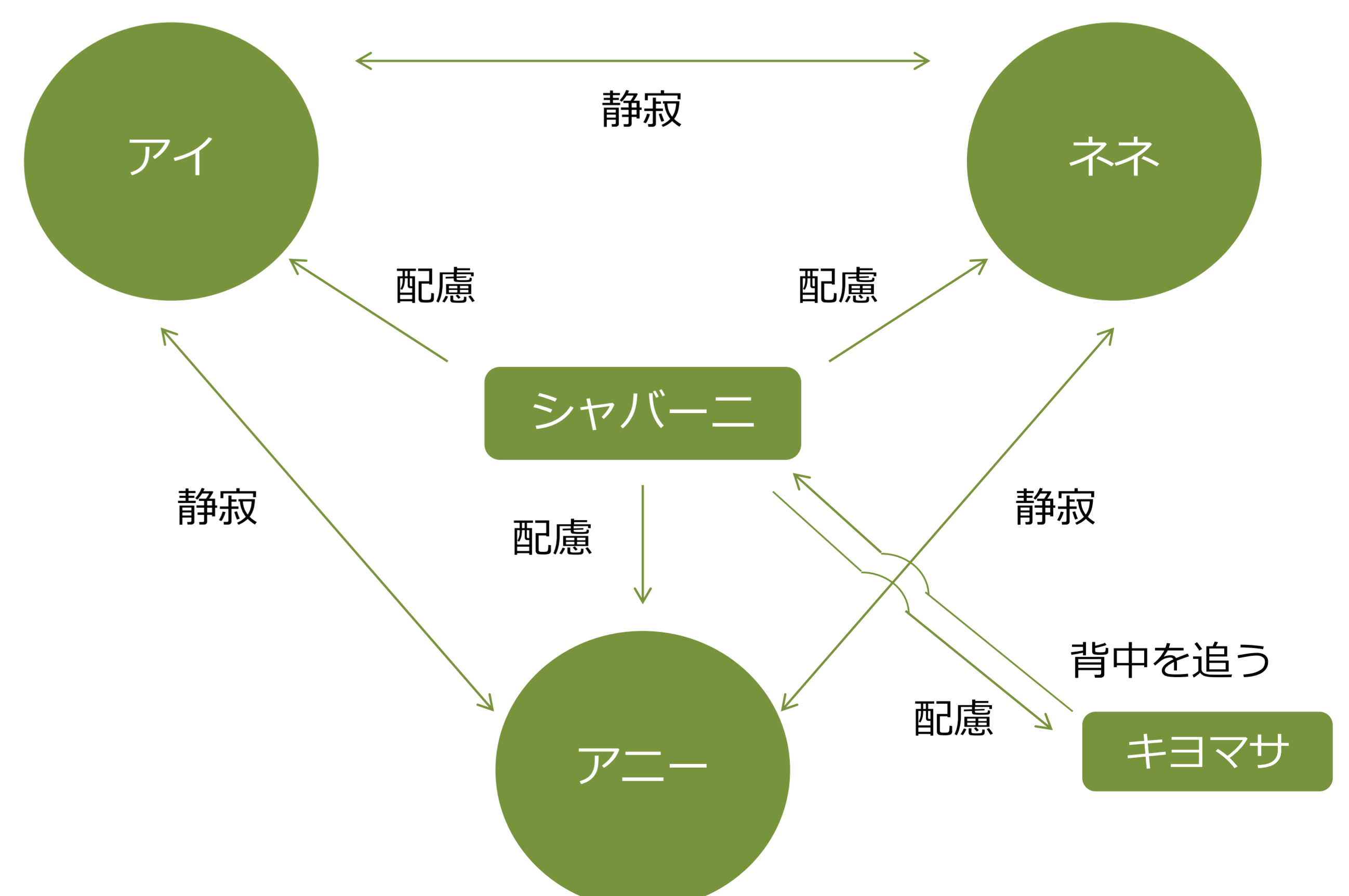
ネネとアイの関係はドライ

メス同士の接触は少ない

- メス同士は本来ドライ
- ボスオスによる配慮により平和な関係



東山動物園ニシローランドゴリラ 考察から相関図



今後の展望

ゴリラの息子は父から直接教育を受けることはないが、集団全体に配慮する父の姿を見て学び、自らも配慮するようになる。今回、不十分なデータではあるがそんな予察を得た。また、本来母娘であるアニーとアイとの関係に、たがいを「遊び相手」と認めるような新たな関係が結ばれている可能性も見いだせた。シャバーニがボスオスとして集団の構成員に様々なかたちで配慮を見せる間に、集団構造に多様な変化が生じているようである。今後の展望としては、「キヨマサのボスオスとしての成長とその後」「アイとその周りの個体との複雑な関係の追究」「シャバーニとアニーの間で見られたグルーミングの意味」、この3つのテーマについてさらにデータを蓄積し検証に努めたい。